

2014/05/20

会員の皆様

稲垣評議員より Iain Campbell 博士ご逝去の追悼文をお寄せいただきました。
学会より Campbell 博士に追悼の意を示すことといたします。

日本核磁気共鳴学会理事会

Iain D. Campbell 教授を偲んで

北海道大学大学院先端生命科学研究院

稲垣 冬彦

EriksKupce 博士より Iain D. Campbell 教授が亡くなられたとの連絡を受けたのは3月7日であった。だいぶ前から血液のガンを患っておられたが、2012年8月リヨンで開催された ICMRBS の帰りにオックスフォードに立ち寄り、お目にかかったのが最後となった。

Iain と初めて会ったのは1979年、私が Ramsay 奨学生として R. J. P. Williams 教授のグループに参加したときである。70年代初めに解糖系酵素の反応機構を NMR で解明することを目的として、Oxford Enzyme Group が Rex Richards, R. J. P. Williams により組織された。当時、最大の NMR 研究グループであり、オックスフォード大学を中心に先駆的な NMR 研究が行われていた。特に Campbell, Dobson, Williams による常磁性ランタニドイオンを用いたリゾチームのマッピングの論文は実験面でも解析面でも卓越した研究であり、私が留学先としてオックスフォードを選んだ理由でもあった。Williams はメチル基の緩和時間解析よりタンパク質のダイナミックスの解明とその意義を明らかにしたいと考えており、私が日本で研究をおこなってきたエラプトキシンを対象として Iain との共同研究を計画してくれた。

Iain はセントアンドリュース (St. Andrews) 大学の物理の出身で、オックスフォード大学に移り、Rex Richards の研究グループで NMR 装置の開発に携わったのち、生化学教室の講師として新しく研究室を持ったばかりであった。NMR 装置や磁気共鳴の物理に造詣が深く、CPMG 実験のノウハウや緩和時間解析の詳細についてよく彼の部屋で議論した。オックスフォード時代の懐かしい思い出である。お互いに年齢的にも近いこともあり、家族ぐるみの付き合いが始まった。私の娘がオックスフォードで生まれたときには、家内が寂しい思いをしているのではと花を持ってお祝いに駆けつけてくれた。Iain はスコットラン

ド人であり、日本人とは心情的にも共感し合える部分が多かった。

日本に帰国後も国際会議で会ったり、数年おきにオックスフォードを訪問した際には、**St. John's College** の昼食会や晚餐会に招待してくれた。研究の話や家族のことなど親身になって相談に乗ってくれた。シグナル伝達の構造生物学をお互いに研究していたこともあり、**Iain** との議論は研究の進展にずいぶん役に立った。**Iain** は国際学会によく **plenary lecturer** として招待されたが、よく準備された講演内容、美しいパワーポイント画像を用い、わかりやすく分野のレビューや自分の仕事について紹介した。英国人らしい格調の高い講演であった。物理学としての **NMR** をはじめ、シグナル伝達研究、細胞接着研究と **NMR** 構造生物学のお手本となる研究を彼らしいエレガントさを持って進めた。ドメインに基づく彼のシグナル伝達研究は **NMR** の特徴をよく活かした研究であり、**NMR** 研究の金字塔の一つとして評価されている。

Iain は教育者としても高い評価を受けている。研究室の出身者の中から多くの大学や企業で活躍する **NMR** 研究者が育っていった。授業にも情熱をささげていた。授業の内容を **Biophysical techniques** という単行本にまとめて 2 年ほど前に出版したが、**Iain** はこの授業は自分も楽しみで、毎年授業内容に手を加えていると楽しそうに語っていた。教師としての面目躍如である。我が国からは三森文行博士（国立環境研）、川口謙博士（東レリサーチセンター）、神田大輔博士（九大生医研）、橋本康弘博士（旭化成）、吉永壮介博士（熊大薬）が **Campbell** 研に留学したことを付記する。

最後に **Iain** のエピソードを一つ紹介したい。2006 年、稲垣は第 2 回札幌カンファレンスを開催し、**Iain** を含む 10 名の **NMR** 研究者を札幌に招待した。会議終了後、小樽、ニセコ、洞爺湖をめぐるバスツアーを企画した。余市のニッカウキスキー工場の見学ルートに創業者竹鶴正孝とリタ夫人の生涯をまとめたパネルが展示されていた。正孝はグラスゴー大学の醸造学科に日本人として初めて留学し、リタ夫人と知り合った。リタ夫人は家族の反対を押し切って正孝と結婚し日本に渡り、正孝を蔭に日向に支えて日本で生涯を終えた。100 年近くも前に日本にやってきた同朋の生涯は **Iain** の心を感傷的にさせるのに十分であった。彼はニセコに向かうバスの中でマイクをとり、スコットランド民謡を歌い始めた。